

# 近代的発展の表象としてのソウル: その成長と景観

崔 基燁

誠信女子大学校社会科学大学

## ソウル—近代史 激動の中心空間

ソウルは14世紀以来600年以上、国都としての地位を維持してきた由緒ある都市である。世界にはソウルより歴史の長い都市がたくさんあるだろうが、ソウルのように中・近世から現代にいたる過程のなかで数多い政治・経済的変化の層位を積み重ねてきたケースは多くないだろう。東アジア独特の地政学的位置を占めているという理由で惹き起った北と南、つまり大陸と海洋両方の外部勢力からの挾攻、及び被支配者としての自主的な近代化を主導することができなかった歴史的状況、そして民族間の相克と廃墟化、その廃墟の中で回生して経済的復興を達成し、世界都市（global city）に成長した都市がソウルなのである。

ソウルはこのような東アジアの近・現代史の激動の原因として、なおその結果としての中心的空间といえる。この空間が歴史の各々の時点において造ってきた都市の構造、景観、活動の地層はほかの東アジアの都市に比べれば、より独特で広範な世界的、アジア的脈絡の意味と価値をもっていることは確かである。

1945年の分断とenergyをはじめとする重要資源及び重化学工業の北朝鮮の遍在に起因する経済的沈滞、そして1950年代の韓国戦争（朝鮮戦争）後の廃墟化を克服し、1960年代の初めから成し遂げた高度経済成長は工業化と都市化を加速させ、大規模の国土及び都市開発計画を推進させた。大都市は資本蓄積を促進するために都市空間を生産力として利用し、位置の差別化を通じた地価形成の契機をつくるために努力を果たしてきた。都市は資本主義的産業化、すなわち、近代的産業化を導くために不断の成長と発展を続け、近代的都市構成様式としての変化を指向してきた。発展を重ねるために国家権力と資本が協力し、この協力を裏付けるために国家的次元の開発計画、立法がなされるなど、強力な都市発展の政治的機制が作動された。

このように成長と発展を基本動学として、近代社会的都市構成様式としての変化を指向して都市の物理的、機能的及び社会的構造を再編していく都市を発展主義大都市（developmentalist metropolis）という。開発至上主義と成長機械（growth machine）的思考の所産による都市形成過程の産物を指称している。ここで近代的発展という表現は脱近代、或は近代後期（post-modern）以前の社会構成及び生産様式を総称しており、認識論的には機能主義、生産様式としてはfordism、権力関係としては統制的な官僚主義を基盤とする社会的、経済的な展開様相を意味する。したがって、この近代的発展という表現は大規模、画一的な規格化を基本とする社会、経済、文化、空間の諸部門の様式全体を含めており、今日のpostmodern、postfordismの認識論的な基盤から考える時、主体や個性、そして差別の实在といった世界の多様性とか、或は歴史的脈絡や生態的健康性を軽視するという側面において批判され、また克服されるべき傾向だという暗示を内包している。

朝鮮半島の近代化、ならびにソウルの近代化はすでに1800年代の末から1900年代の初めにわたって外部勢力によって遂行されてきた。しかし、ここでいう近代的発展というのはそのような単純な近代的機械化や制度の導入を意味するのではなく、資本と政策的統制及び調節の機制を動力として持続的に成長と拡大を追求していくfordism的経営の展開過程を指している。ソウルは1960年代から今日に至るまで、このような近代的発展を達成してきた最も代表的な都市である。ソウルは1945年の大韓民国（正確には1948年に独立政府樹立）の首都として出発した当時、90万を越えていた人口が40年後の今は10倍以上も増えて1988年には1000万を越え、世界的に大規模の都市になっている。急速な成長なのである。

## 圧縮的都市成長と開発

人口成長：韓国の都市成長を一般に圧縮的都市成長という。これは圧縮的都市産業化に依る人口成長を意味する。1962年、第一次経済開発五ヶ年計画の実施以後、高度の成長過程が持続され、1960年に81ドルであった一人当りGNPの規模が1995年には1万ドルを越えたが、これは都市の製造業の成長があったからこそ可能であったことはいうまでもない。都市の産業化にしたがって農村の人口が都市に集中し、都市の人口率が1960年に約36%であったのが1970年代には50%、1995年には約86%に至り、都市化段階の最終局面に入ったのである。

ソウルの人口は、分断直後である1945年の90万人余り、1953年には100万人を越え、そして1988年には1000万人を越え、10倍も増加する結果となった。又1992年にはほぼ1100万に近付き、それを頂点に、後は減少のなりゆきとなった。1945年から2000年までの間の、5年ごとの人口変化を調べてみたが、1945年から50年の間、つまり、終戦直後の海外からの同胞の帰国と北朝鮮から逃げてきた越南民の数を除いて考えれば、増加の幅が一番大きい期間は60年代から70年代にかけてである。60年代には前期対比55%以上増加し、70年代にも約23%乃至45%の急激な増加趨勢を見せている。55年から80年までの全国人口と都市人口の年平均成長率を比較すれば、60年から70年の間の急激な都市成長の推移がはっきり現れている。特に、66年から70年の間の全国人口の年平均的成長率が1.9%に過ぎないのに対し、ソウルの年平均の成長率は殆んど10%に及んでいる。

55年の前期比の減少は韓国戦争に起因するもので、これを例外にすればソウルの人口増加は全国人口増加に比べてはるかに高いということがわかる。全都市人口の増加と比べてみても80年代以前のソウルの増加率がそれより大きい。ソウルの人口の増加率が全国の人口率や全都市人口の増加率を超過しているという事実はソウルへの人口集中を確認することである。

全国の人口に対するソウルの人口の占有比率は持続的に増大し、90年代以降は全国人口の殆んど4分の1がソウルに集中している。全体都市人口に対する占有比率をみても65年から80年代にかけてソウルは全国都市人口の40%内外を占有してきた。首都での人口集中現象は韓国の経済の地域的集中現象をはっきりと反映している。限定されている製造業ならびにその他の産業生産施設と産業活動が経済成長の初期段階に首都と南東臨海地域の限定された地域に局地的に集中した結果、農村の潜在失業人口が流入され、戦後のbaby boomまで重なって、60年代から70年代の間にはソウルの人口の自然増加と社会増加は同時に急激な増加を見せる

表1 ソウル及び全国の人口増加

区分		1945	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
ソウル	人口数	902,000	1,693,224	1,574,868	2,445,402	3,803,360	5,525,262	6,885,502	8,364,379	9,693,110	10,612,577	10,231,217	9,853,972
	前期比 増加率 (%)		87.7	－7.0	55.3	55.5	45.3	24.6	21.5	15.2	10.1	－3.6	－3.7
	年平均 増加率 (%)	-	-	9.2      7.6      9.8      4.5      4.0      2.9      1.9      0.7      -0.7									
	對全國 人口比 (%)	5.6	8.4	7.3	9.8	13.1	17.6	19.8	22.3	23.8	24.4	22.9	23.2
	對都市 人口比 (%)	26.5	48.7	29.8	35.0	38.8	42.7	41.0	39.0	36.5	32.8	29.2	24.2
全國	人口数 (1000)	16,140,500	<sup>(49)</sup> 20,170,000	22,152,600	24,989,241	<sup>(66)</sup> 29,192,762	31,465,694	34,706,620	37,436,315	40,448,486	43,410,899	44,608,726	44,711,584
	前期比 増加率 (%)		25.0	6.7	16.1	16.8	7.8	10.3	7.9	8.0	7.3	2.8	2.8
	年平均 増加率 (%)	-	-	3.1      2.6      1.9      2.0      1.5      1.6      1.4      0.6      0.6									

資料：統計庁、人口 住宅調査報告書、経済企画院 統計年報

ようになったわけである。70年代、特に後半期以後は70年代の初期に経験した二回にわたる石油波動を教訓にし、産業構造が改編され、製造業の地域的な拡散が進行されて地方工業都市が増加し、ソウルの郊外工業都市も成長しつつ、ソウルへの人口増加と集中は段々と減ってきたのである。

Asia NIEs（新興工業 経済地域 Newly Industrialized Economics）国家の経済及び都市成長が製造業の成長と発展に基づいているのは周知のことである。だとすると、ソウルではどういう産業化（工業化）の過程が60年代初期の近代的発展と成長の原因になったのであろうか。韓国政府が62年から推進しはじめた第一次経済開発五ヶ年計画の主な目的は輸出主導型の産業を基本とする経済成長の政策であった。この輸出drive政策にしたがって1963年から1970年にわたって韓国ではじめての国家計画工団である、韓国輸出産業工団がソウルの西南端の京釜線鉄道の両辺、当時の九老洞（現在の行政区域は衿川洞）に造成された。通称、九老工団と命名されているこの工団は韓国輸出産業基地の温床として、成長発展政策の出発地として象徴されたが、70年代以後に造成された全国各地の大規模の特化団地の活発な成長に隠れて相対的に沈滞現象をみせてきたが、最近digital産業団地に取り替えられた。とにかく、60年代の産業化の初期段階においては製造業の内容が単純だったので、ソウル、釜山などの大都市に労働集約的輸出産業の育成を図る政策とも結び付いてソウルでの人口集中は急速に進行された。1958年から2000年までの地域別製造業雇用を検討すると、1958年から1978年まではソウルの雇用占有比率が全国の4分の1以上を占めており、80年代初期から次第に減少し2000年には17.1%に達している。

表 2 対全国ソウルの製造業雇用比の変化

単位：％

区分	1958	1968	1978	1983	1988	1993	1996	2000
製造業	25.0	34.0	25.4	21.1	17.7	14.3	11.8	17.1

出処及び資料：朴 杉沃, 2000 及び 統計庁 鉱業統計調査報告書 2000

60年代の産業化の初期段階を経て70年代に進入してから、多様な分野の製造業が発展するにしたがって、各製造業の立地特性を追求して製造業の地域的分散が活発になり、首都圏では10個所以上の衛星都市が市に昇格しただけではなく、80年代末から90年代の間に、ソウルの周辺に新都市が建設されてソウルの人口集中を鈍化させた。また1990年代にはソウルの転出人口が転入人口を上回るようになった。一方、ソウルの産業別人口構成においても、第2次産業の人口が1993年を頂点に、その後、徐々に減少しはじめ、第3次産業においても生産者サービスの成長が目立っている趨勢であることをみれば、ソウルの産業構造が構造的に再編されつつあり、産業構造再編は都市構造の再編を伴伴するであろうことを期待出来る。

開発：大韓民国時代になって、ソウルの空間的拡大と開発は1963年以後から本格的に推進された。すでに1949年に 北部、西部、南部と南西部への部分的な市域拡大があったが、現在のように市域が拡大されたのは1963年である。今日は永登浦区を除いた漢江以南全体と旧市域北東部の広大な区域があつた時、編入され現在までのソウル市の行政区域の範囲に含まれるようになった。その面積は605.5km<sup>2</sup>であり、それは従来の2倍を越える大規模の地域的拡大であつた。

京城期に計画されていた都市計画区域を改編する作業はすでに1949年からあつたが、朝鮮動乱で中止され、1952年に再びソウル市の用度地域地区制が告示されるようになった。1953年には 避難からソウルに戻ってきた後、戦災地区区画整理事業等が行われ、1957年になってやっと 戦争以前のレベルに復旧された。

以後、ソウルの都市開発は旧都心の再開発、漢江開発、そして周辺部の大規模住宅地開発の三部間を中心に行われた。

旧市街地再開発の始まりは朝鮮朝王室廟である宗廟の南側から南山の麓に至る幅50m、長さ 1.2kmの南北直線区間で京城期に疎開空地帯であつた不良地区開発からであつた。太平洋戦争中、戦災を避けるために空地になっていたこの地区は、韓国戦争以後の行政空白を利用して無許可不良宅地化した都心地区に変わった。1966年にはこの地区の無許可の建物らが撤去され、68年末に鐘路、乙支路、清溪路などの都心東西街路景観を遮断し、南北を縦貫する住商複合建物である5階の世運商街が民資により建設された。今日の都市環境の観点からみると、この計画は機能的及び景観生態的な面からも大失敗作として評価されている。零細な商店らの集合で荒廃地区化した上に、南北連絡通路機能（歩行者専用道路等）も無視され、特にソウルの風水地理上、主山である北岳山の稜線の緑地が昌徳宮、宗廟を通し南山の緑地と連なるようになり、都心の緑地景観の軸が造成されるべき空間を衰老化させたためであつた。

より本格的な都心再開発は1973年に行われたソウルの市庁舎の向う側のプラザホテル（Plaza Hotel）建設を骨子とした小公洞再開発を出発点とし、1979年のロッテホテル（Lotte Hotel）、



ロッテデパート、そして太平路、鐘路一街、乙支路一街、世宗路など、旧都市の核心地区再開発に続く。今日、ソウルの核心業務のビル地区を成している地域である国立図書館、半島ホテル、産業銀行の本店の位置に79年以後ロッテ団地が入るようになったのは、国家権力と資本の提携によるものであった。1977年、政府は首都圏の人口再配置計画を樹立し、江北地域でのデパート新設などを規制する強力な江北抑制政策を行っていた時期であったにもかかわらず、ロッテはホテルの付属建物の用途変更許可をもらうために、37階のホテルとともに25階のデパートの建築を完了し、開館した。政府はロッテグループに租税減免と敷地買い入れの便宜を提供するために、「特定地区開発に関する臨時措置法」という特恵的な法律まで制定し、事業を支援した。

資本と権力の併合による発展主義的な開発が位置的資本蓄積を通じて都市空間を再構造化する様相が明らかに再現された代表的な事例が都心のロッテ団地開発といえる。

ソウルの都心再開発は古宮と学校、1950年代の区画整理事業実施区域である旧市街地の一部を除外すれば、ほとんどすべての市域がその対象に含まれる。70年代以後、企業の資本集中が本格化し、生産現場と経営管理事務が細分化され、都市、特に、都心に産業活動が集中されるようになったのは、柔軟な生産体制に移行している産業構造の再構造化においてもその原因が見られるが、それよりは政府及びソウル市政の都心再開発政策が主要動機として働いたからであった。再開発事業地区の建物用途はほとんどすべてが業務用のビルである。零細的な土地に細分化された旧市街地が大企業中心の整然とした効率的な空間に変わるに従って、雇用構造にも変化が起こり、都心空間から小規模の店等が追い出された。大規模の業務用のビルらが並んでいる都心再開発地区では個々の単位のビルら、そのものが、各完結な機能を行うために、周辺地域との交流をもあまり必要としない「島心」を形成し、都心の常住人口の空洞化を深化させた。

永登浦の工場地区、汝矣島の飛行場を漢江の南に置かせただけで、長い間漢江はソウルの南の自然的な境界になってきた。63年の行政区域の拡大により、ソウルに編入された漢江の南地域が本格的に開発されたのは67年からである。67年にはソウル市は漢江開発3ヶ年計画を推進しつつ、漢江を中心生活圏に入らせ、江辺に高層アパートの市街地を造成し、堤防に高速道路を建設する方針を決め、それに次ぎ、江辺路と汝矣島の開発に着手した。漢江堤防道路の建設で埋め立て地が造成されるようになり、ソウル市は公有水面の埋め立て工事を推進し、67年以後、江北沿岸地域からアパート団地の建設を始めた。

江南地域（永東地域）の大規模の開発を本格的に始めたのは、68年の京釜高速道路の着工からであった。第三漢江橋（漢南大橋）からソウル市境界に至る区間の工事をソウル市が施行するようになり、68年の永東第一区画の整理地区と70年の第二区画の整理地区を合わせ、約900万坪の事業地区がいわゆる「南ソウル」計画案として提示された。73年にはこの地域が特定地区の開発促進地区に指定され、開発は急速に進行された。埋め立てにより造成された計画整理地区では70年代後半以後、漢江に沿った西側の盤浦地区から東側の蠶室地区に至るまで、アパート団地が次々と建設されるようになった。

70年代後半、江北開発の抑制、江南開発の促進政策を推進しつつ、ソウル市は漢江を中心

とする均衡空間の造成を計画し、江北旧都心の機能、施設らの大半を江南に移させようとした。79年まで、13ヶ所の中学、高校を江南に移転させ、それに続き、80年代から90年代にわたりデパートや高級の大規模流通施設、高速ターミナル、立法、司法などの施設を江南に分散、移転させたのである。

86年のアジアンゲーム（Asian Games）と88年のソウルオリンピックのため、82年から86年までには漢江の整備事業が行なわれるようになり、漢江の開発は整備期に入り、美観化するようになった。漢江の南北堤防に沿った高速道路が建設され、総合スタジオをはじめ、各種の競技場、アジア公園、オリンピック公園、63ビル、Lucky Twinビル、貿易会館などの沿辺施設がアパート団地の間に巨大な姿を現すようになり、漢江のあたりはほとんどすべての地域が漢江市民公園に造成されるようになった。

一方、住宅不足による地価と住宅価格の昂騰が社会問題化し、1980年末には住宅の開発促進法を発動させ、江東（高德地区）、江西（陽川区木洞地区）及び江北の北西部（上溪地区）に再び大規模のアパート団地が造成され、純粋な住居タウンが造られるようになった。

最初、江南開発は江北の密集を緩和させるためであったが、計画的に造成された新市街の物理的な有利性、主要な大幹線高速道路及びその他の交通網との連絡性、より広い用地確保、そして名門高校の集中、中産層以上の社会階層の住居地化などのあらゆる優越性のため、むしろ江北を越える都市化を成し遂げるようになったのである。従って、最近江北の落後性がむしろ江南化の不均等な発展の問題として浮上しており、ソウル市は都心の東西を貫流する清溪川路の覆蓋路を撤去、復旧して生態的環境を回生させようとしており、旧市街化地域の中で三つの落後地域に再開発によるニュータウン建設を計画している。

漢江流域の大開発は政府水準により推進されただけではなく、政府が営利を目的とする公有水面の埋め立て事業を行なったという側面から、発展主義の開発政策のある断面を読み取ることができる。国家権力が空間に直接投資し、営利をはかり、法律と制度的に空間の資本化を促進させた。国家と市政府は費用をあまり使わない方法を使い、不動産及び建設事業の利潤を確保し、なおさら建設不動産資本の大規模化を支援する結果をもたらしたのである。

## 旧都心と江南の新核心 — 多核心構造への転換

ソウル市の構造をどういうふうに見るのか。都市構造という時、我らは普通、都市内の社会経済的な機能の分化（分離）と結び付いた土地の利用構造の配列をいう。大半の都市は古典的理論と同様の同心円的な構造と扇形構造、あるいは多核心構造の特性をももれなく混合した構造を成して、各々の独特で多様な構造を持っているように見える。ここでは、構造という表現が持っている意味領域を広げて、第一、都市の物理的な形態と構成の配列としての構造、第二、歴史、社会的過程の投影された景観的構造、そして第三、経済社会的機能の分化による構造に分けて検討しようとするが、景観的構造に対しては次の章において敘述することにする。ここでは二類型の構造のみにふれることにする。

まず、物理的構造と考える際、ソウルの定都過程において最も重要視された立地選択の条件は風水地理的な局面形成の構造であった。四神で寓話された四山（或は五山）と一水（河川）

がソウルの元型的な空間構造の基本骨格を成している。この基本的な形態と構造とが以後のソウルの幹線道路網の配列や都市拡大に影響をおよぼし、今日の都市形態や構造を成立させる土台となった。四山の稜線に沿って築造された城郭に囲まれた領域が旧市街の都心であり、まわりが約19 km、大体不規則的な楕円形である。これを円形に換算すると面積は約28km<sup>2</sup>になる。閉鎖された狭小な領域であった



図1 ソウルの行政区及び3核心

ため、平面的で整然とした街路や街区の造成及び都市の連続的拡大が困難であったため、後の人口増加と機能活動の成長過程において街区、土地の零細化と稠密化をもたらすしかなかったのである。60年代末から70年代にわたり、四大門の外側に副心の兆しが見えるようになるまで、長い間、一都心の構造を維持するようにならざるを得なかった。この四大門の内から外に通る通路は四つの山と山との間の谷部や鞍部を通過する経路しかなく、旧市街と四大門外部との交通は限られた路線に集まるしかなかった。現在は土木技術の発達により、トンネルを作ったり、丘陵を崩して多くの道路を開発しているが、依然として路線が限られているため、広域に拡大された四大門の外側との交通は最も困難な都市生活の問題となっている。

ソウルは漢江を真中において江北と江南に大きく分けられる都市構造を持っている。ソウルでの江北と江南という二分法は、単純な地形的な区分という意味よりは旧と新、落後と先進（開発）、住宅価（地価）の底・高の差異として記号化された。

江北の都心が風水地理説に基づいて四神山に囲まれた伝統的な象徴空間の中で発達してきたのに比べて、江南の新核心は純粋な経済社会的な機能空間として造成された。即ち、江北と江南の結節をその発生的な意味の側面では象徴空間と機能空間とに対立するようになる。江北の都心は四神山に囲まれた閉鎖的空間を持っており、外部との通路も多くなく、外部から街路網が放射状に都心に向かって集中する構造を持っているに比べ、江南は開放的な空間に計画的な街区が造成された。

次の機能的構造という観点から見ると、60年代にはまだ未開発で、空間的都市化も微弱であったため、四大門内（城郭が日帝時代に撤去され、城門のみが残されているため、このような表現を使う）である鐘路区と中区の範囲は都心を形成する単核構造を持つようになった。70年代にいたると、江南（永東）が本格的に開発され、都市の成長、拡大が活気を示すようになり、1都心、7副心（あるいは7地域中心）とともに循環道路と放射状の道路体系が論議されるようになる。80年代には74年に開通した地下鉄一号線に次ぐ2、3、4号線が開通す

るにつれ、駅勢圏を中心とする蠶室、鴨鰲亭など大規模の新興商圏が形成され、都市の機能的結節が非常に成長した。これにソウル市の構造は1主核、3副核（永東、永登浦、蠶室）、13副心、50地区中心に改編されるようになり、まさにソウルの新たな機能的結節が江南に偏重する構造に移行していることが分かる。

ソウルは多核構造に再編されているという論議が活発である。即ち、90年代以降、旧市街都心、江南（永東）、永登浦（汝矣島を含む）の三つの核が階層的關係ではなく、各其独立的に対等な機能水準を維持している並列的な關係であるとみる観点が多核構造論である。旧都心が行政的統治機能（総合庁舎、市庁など）など、管理機能と言論機能などに排他的優勢をみせることに比べて、江南は司法機能や生産者サービス、事業サービスの機能数から他の結節を追い抜いている。ホテルや貿易センター（Korean Trade Center）、COEXのconvention centerの機能施設など、国際的機能も江南の専門化した機能である。

汝矣島を含む永登浦は全般的に都心や江南よりは弱いが、金融や立法（国会）、放送言論の専門化と製造業の機能などでは相対的特化を見せている。

このように、今日のソウルは旧都心の単核構造から旧都心、江南（永東）、永登浦（汝矣）の3核に併存する多核構造に移行する傾向を見せている。

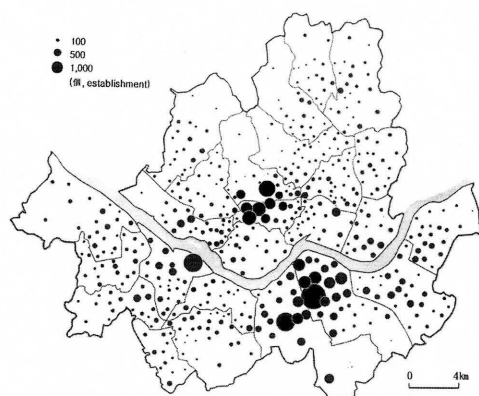


図2 ソウルの生産者サービス（2000）

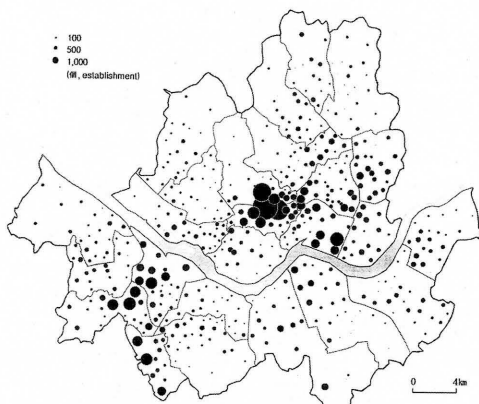


図3 ソウルの製造業体（2000）

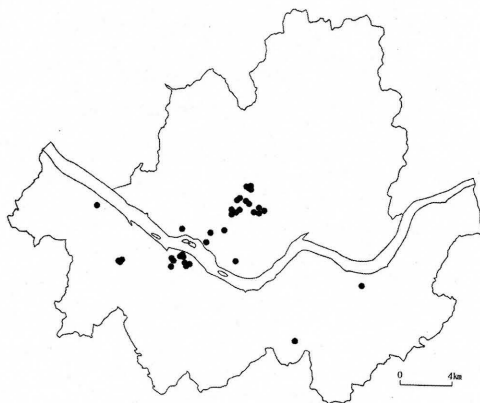


図4 ソウルの新聞放送社（2000）

表3 ソウルの空間構造 — 江北・江南の二分構造と三核形成

二分構造	核 心	空間の生産	領域の景観 及び特性	外部との連結	核心機能
江北	鐘路区 中区 (四大門内)	*旧市街発生地 *象徴空間 (四神山) + 機能空間	*閉鎖的、 *零細の筆地 街区 *幹線路・放射状 *支線路・不規則 *歴史的景観・ 古宮、韓屋	*放射状 幹線路	*CBD *政治的中樞管 理機能 *行政（政府総 合庁舎） *業務、商業、 金融、文化 サービス *伝統市場 *住商混在
	江南区 瑞草区	*計画的 新市街地化 *機能空間	*計画的 格子状街路網 *街路高層ビル *大規模 高層 アパート 住 居団地	*高速道路 *橋梁 *江辺高速化道 路	*国際機能（貿 易会館、空港 terminal、 COEX, hotel） *司法（法院団 地） *IT産業 -venture産業 *生産者 サー ビス *其他業務 商 業 サービス
江南	永登浦区 (汝矣島包含)	*計画的 新市街地化 *機能空間	*計画的 格子状街路網 *高層ビル *広場 *アパート住居 団地	*江辺高速化道 路 *橋梁	*立法機能（国 会） *金融 *放送3社 *通信 *業務 *製造業

表 4 区別 総雇用者数、1981、1991、1995

(単位：名)

区	1981	1991	1995	増減 (%) (1981-1995)
江 北				
鐘路	342,129	317,405	274,904	-19.6
中	520,949	558,204	423,153	-18.8
龍山	101,222	125,174	128,010	26.5
城東、広津	153,970	216,380	207,639	34.9
東大門、中浪	142,222	219,042	228,503	60.7
城北、江北	69,992	81,624	155,414	122.0
道峰、蘆原	114,304	157,931	127,269	11.3
恩坪	40,865	57,506	68,323	67.2
西大門	61,066	61,634	80,761	32.3
麻浦	60,294	153,811	134,726	123.4
小計	1,607,013	1,948,711	1,828,702	13.8
江 南				
江西、陽川	81,874	153,026	188,430	130.1
九老、衿川	179,609	255,804	238,006	30.8
永登浦	198,073	342,620	326,945	65.1
東雀	48,171	61,820	79,725	35.5
冠岳	47,567	94,345	92,264	94.0
江南、瑞草	158,625	554,519	847,370	434.2
江東、松坡	57,384	218,589	276,155	381.2
小計	771,303	1,680,723	2,048,895	165.3
総計	2,378,316	3,629,434	3,874,597	62.9

資料：統計庁，1982，1992，総事業体統計調査報告書。  
ソウル特別市，1995，事業体基礎統計調査報告書。  
Ki-Suk, Lee, 1997, The Emerging Multicenters and Some Implications of Global Change in the City of Seoul, Korea.

表5 新旧核心の雇用構造（1981-95）

産業 \ 核心	旧核心 (鐘路、中区)			南部核心 (江南、瑞草区)		
	1981	1991	1995	1981	1991	1995
総計	863,078 (100%)	875,609 (100%)	698,057 (100%)	158,625 (100%)	554,519 (100%)	847,370 (100%)
農水産業等	869 (0.10)	2,376 (0.27)	80 (0.01)	309 (0.19)	1,227 (0.22)	4,056 (0.48)
鉱業	1,321 (0.15)	629 (0.07)	2,494 (0.36)	86 (0.05)	2,041 (0.37)	1,319 (0.16)
製造業	145,816 (16.90)	241,074 (27.53)	118,169 (16.93)	11,142 (7.02)	117,035 (21.11)	103,525 (12.22)
電気、ガス等	1,015 (0.12)	643 (0.07)	513 (0.07)	2,305 (1.45)	3,468 (0.63)	2,003 (0.24)
建築業	282,619 (32.75)	152,828 (17.45)	65,284 (9.35)	76,675 (48.34)	117,851 (21.25)	171,490 (20.24)
卸、小売業	88,325 (10.23)	240,349 (27.45)	256,493 (63.74)	4,957 (3.02)	154,558 (27.83)	296,325 (34.97)
交通、通信業	46,664 (5.41)	45,709 (5.22)	37,853 (5.42)	5,871 (3.70)	16,644 (3.00)	28,619 (3.38)
金融、保険及び事業	113,736 (13.18)	135,886 (15.52)	149,309 (21.39)	14,753 (9.30)	85,229 (15.37)	169,988 (20.06)
社会及び個人サービス	56,885 (6.59)	56,117 (6.41)	67,859 (9.72)	14,397 (9.08)	56,686 (10.22)	70,045 (8.27)

資料：統計庁，1982，1992，総事業体統計調査報告書。

ソウル特別市，1995，事業体基礎統計調査報告書。

Ki-Suk, Lee. 1997。

最後にソウルの構造を土地利用構造の側面から検討してみよう。古典的、生態学的な同心円構造を現代都市に適用することはできないが、地価が結節中心から距離が離れるにつれ、下降する距離衰減（distance decay）の原理を完全に否定できない以上、長期間の単核心構造を形成してきた旧ソウル部の土地利用パターンから、過去より持続してきた生態学的な遺産を読み取ることがある程度は可能であろうと考える。旧都心の鐘路区、中区の業務地区が都市の核心を成し、その外方に向かって順次的に都市型の製造業地区と卸売り業地区、住・商・工業の混在地区、旧単独住宅地区、工場地区、大規模のアパート住居団地地区とに展開する土地利用の配列パターンを都市のあらゆる方向からは不可能であるかもしれないが、一部のセクターでは見ることができる。特に、東側に向かって光熙洞、新堂洞、往十里、聖水洞の方向からそのような構造が見られる。

## ソウルの景観——風水的局面と消費景観

景観というのは、解説されるべき対象、即ちテキストである。テキストとしての景観というのは、各時代の複雑な社会・経済的関係の総体であるイデオロギの再現である。したがって、都市景観の解説から各時代の総体的理念を作り出していく過程、その過程を導く主体の性格に



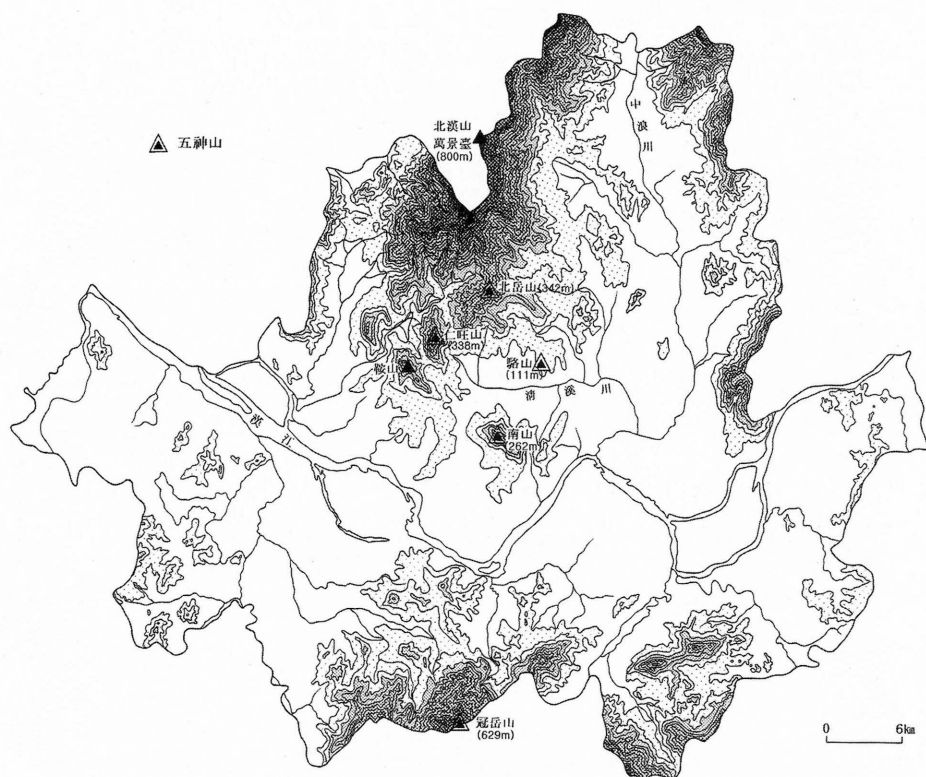


図5 ソウルの地形景観と五神山

関心を集中し、都市と都市に住んでいる人々を読み取ろうとする試みが優先されるべきであろう。

ソウルは分厚い歴史の層を持っている都市であるだけに、景観構成の内容も各時代的、類型的にも複雑多様であり、考えるべき具体的景観対象をどんな方法をもって選択すべきかのことも問題であろう。

景観解説において根本的な課題であるイデオロギの問題を前提とすれば、ソウルの景観記述の方式は政治的な支配類型の時代的展開の層序によって展開する方法が最も無難であろうと考える。ソウルの景観の生産過程を朝鮮期の歴史景観、日帝時代の近代景観、そして60年代以降の発展期の現代景観に分けて検討してみよう。

すでに、よく知られているように、近世初期の定都過程において、優先的に考慮された立地選定の要因は風水地理的な形局であった。18世紀の半ば頃の朝鮮朝では実学思想がもうすでに萌芽期を過ぎ、客観的な自然観が発展した時期であったにもかかわらず、1751年の李重煥の『圻里志』での「地理」は依然として「風水地理」を意味しているように、中世の高麗期の中心的社会・政治的イデオロギであった風水地理説は立地の問題と重なって、近世に至っても主な思考様式として受け継がれてきたのである。

ソウルは主山（玄武）である北岳山（342m）、青龍である駱駝山（111m）、白虎である仁

旺山（338m）と案山である南山（262m）とに囲まれた城郭内が都城であり、漢江を通りすぎ、彼方の朝山である冠岳山（629m）が主山と向い合っている形局をもっている。60年代以降、江南（永東）がソウル市域に編入されるようになり、市域は冠岳山の下まで拡大され、全体の風水形局を完全に満たすようになった。冠岳を除く四神山と再びそれと連なる山地及び丘陵により、あまねく囲まれたソウルの盆地は、300m内外の山地が人間尺度ともよく似合う端景を成立させ、安定感に満ちた領域を形成している。特に、北岳山と南山は市街地の北と南からお互いに向い合う一つの対を成しつつ、最も明確で大きい景観的なlandmarkになってソウルを象徴する。漢江は南側に流れつつ、山河の襟帯の形局を成し、都城内の地形は北・北西方が高く、南方の漢江側に微微たる斜めをもってゆえ、主山（北岳山）の麓に子座午向として位置している宮から、支配者は男性的、帝王的な太陽の方向に向かって俯瞰することができる。

現在のソウルでは高層ビルを除くと北方と西方に品高くそびえ立っている主山とその山の麓に位置している古宮建築、それらの間の伝統韓屋、そして向う側でそれらと正面に対座している柔軟な姿の南山からなる空間と景観は生態、審美、情緒、防衛のあらゆる面においても意味を持っている。

惜しくも歴史景観は近代的開発政策により所々で切断、撤去され、その景観の連続性を維持できなかった。日帝期は景観の断絶が最も深刻だった時期であった。植民統治を強めるため、朝鮮の伝統と文化を自己式の近代化に代置させていった時であった。城郭を撤去し、光化門を崩し、王宮の前を貫く総督府庁舎を立てるなど、歴史景観を都市の近代化の邪魔物として取り扱った。

今日のような、近代的なソウルの景観の基礎は日帝期に確立されたものである。光化門・世宗路・大漢門・ソウル駅に至る太平路は近代的な街路計画の第1号事業であり、日帝統治の象徴的街路の軸であった。その世宗路の黄土岬広場と市庁（京城府庁舎）広場とがワールドカップの応援の熱気を世界に知らせた韓国の喊聲の広場と化したのである。鐘路、乙支路など、旧市街の今日のような格子状の街路網は、1900年代の前半に改築されたり拡張されたものである。

北村と向い合っている南山の麓に南村を形成し、そこに居住していた日本人たちは、今日の忠武路、明洞、筆洞、会賢洞、小公洞に居住地と商店街を形成していた。従って、この区域には市庁、韓国銀行本店、朝鮮ホテル、美都波デパートなどが今日までその位置を占めており、筆洞、厚岩洞などには日帝時代の家屋が残骸のように、所々残されている。龍山の広い米軍基地と国防部などになっている軍事団地も同様に日帝が1905年以降、軍事基地として立てた地域である。

庁舎の西側の向う側から徳壽宮の後ろには外国公館らが近代初期から近代化による建築として特殊な景観的区域を形成して今日まで存在している。

朝鮮王朝の王宮を貫く雄大なルネサンス式の石造建物として立てられた植民地支配の総本山であった総督府庁舎は、その建築史的な位置のためにと時々論議されてきたが、とうとう1995年には撤去され、景福宮は再びその景観の連続性を回復するようになった。

現代的景観の新たな登場は60年代以降から始まる。韓国動乱のあと、市街が廃虚化し、清溪川の辺り、日帝期の疎開空地代であった宗廟・筆洞に至る区域、そして丘陵地帯にはいわゆ

る板子村という掘っ立て小屋の無許可住宅地が形成された以外には日帝時代とあまり変わっていない。しかし、60年代になり経済開発計画の影響によりソウルの人口が急速に増えつつ、現代的な建築が本格的に登場するようになる。疎開空地地の掘っ立て小屋を整理し、都心を南北に切断して1968年に世運商店街を立て、それに続き、鐘路二街の3・1ビル、3・1高架道路、政府総合庁舎など、当時としてはソウルの代表的で現代的な高層建物と巨大構造物が相次いで建築された。急速な経済成長は60年代後半から都市景観の現代化を加速化させ、高層建物と巨大構造物によって占められるようになった。機能主義的な国際様式によって都市景観は画一化していき、都市景観の発展主義的な開発は70年代を通してもっと急激に進行された。一方、主体性と民族の正統性を定立するための政策が推進されて、公共の建築物の伝統復古的な様式が流行するようになる。例えば、60年代の光化門の復元、70年代末の世宗文化会館などがその政策意図をよく反映している。それ以降、記念的な建築物に伝統的な様式を加味した現代的建物として登場してきた。

70年代には京釜高速道路と漢南大橋が建設され、その周辺の永東地区が開発されつつ、江南に新しい市街地が建設され、ソウルは江南と江北とに二分化された。整然とした街路網のパターンに大規模の高層アパート群が漢江の辺りに沿って立てられ、徐々にアパート団地は内陸に広げられて世界的にも数少ない広大なアパート地区を造成した。一方、都心の再開発により旧市街の核心には高層の大規模デパート、ホテル、企業本社、金融機関、言論社などの業務ビルらが高層化の頂点を成し遂げてきた。

都市建造景観の現代的な大規模化は工業技術の発現であるとともに、資本集中化の発現でもある。政治権力と資本が密接した結合関係を維持し、共生する中で、空間的な位置の差異を作らせて資本の集中化の傾向はもっと深刻化し大規模の建設不動産を育成させたのである。

80～90年代には経済的成熟とともに生活の質と環境に対する社会全般の認識が高められるようになり、公共施設も成長一倒から福祉環境問題の改善にもっと目を向けるようになり、86年と88年のアシアンゲームとソウルオリンピックの開催のため漢江整備事業を推進するようになった。漢江の兩岸の堤防にそった高速道路が建設され、漢江辺りの漢江市民公園をはじめとする色々な公園が造成されて蠶室総合競技場、KTC（貿易会館）、63ビルなどが立てられるようになる。漢江はソウルの中心となり、漢江辺りがソウルの現代的景観を代表するようになった。環境生態的な関心の高揚は南山の外国人アパートの撤去（1994年）、龍山米軍基地返還の論議などによく表れている。

80～90年代に入り、ソウルで目立つ景観様相の一つは、消費景観の増大である。都市全体は多様な階層と集団の消費文化の分節的景観の集合になっていくのが今の現状である。都市が機能的に分化していくというよりは消費景観に分化していくという表現が適当であろう。様々な種類の階層と集団との価値意識と要求を中心として差別化された消費様式が展開され、その結果、消費の場所的分節が表れるようになるが、これは文化という型式に含まれた消費様式が景観に表れる傾向を意味する。若い世代と安い価格を狙った大規模の東大門fashiontownのビル群は多様なイベントを通して、景観自体を商品化している。ソウルでは最も消費水準が高く、世界的流行の伝播を導く江南の鴨駒亭洞のロデオ街のポストモダンな建築景観もやはり場所と

景観の商品化といえるだろう。

江北の大学路、新村、明洞、江南の鴨駒亭洞、三成洞の貿易センターとCOEX mall、江南駅、蠶室ロッテワールドなどは場所から作られる特権的、象徴的な意味が差別化された景観の生産を助長する。それらは文化、大学村、上流層、国際波、若い世代、スペクタクルのような文化的記号で再現される景観と場所である。その場所の商品は物質の品目というよりは物品とともに景観と場所の総体的な価値といえる。江南の三成洞COEX mallの場合、周辺には有名デパート、空港ターミナル、有名ホテル、韓国貿易センター（KTC）、convention center、展示場、最大の国営企業である韓国電力などの数多い業務、慰楽機能が集中して団地化しており、その背後には、ソウルの最高人気街である学院街があり、韓国最大の郊外新都市である盆唐との交通接点を成している。

このような建造景観はこれらの場所を商品化させ、建築景観は消費を導くため混成模倣の様式を持っている。消費文化を助長し、消費を導くため、建物をはじめとして場所の景観はポストモダン式の装飾と形式とに美化されている。特定の場所は景観とともに固有の雰囲気と象徴を作り、その雰囲気と象徴性自体が商品化される傾向が明らかにみられるが、ソウルの都市構造においてすでに言及したように、多核の分散過程とも一致する現象である。最近、東大門のfashion townのように、タウンという呼称が一般化することも場所、景観の独立的分節と同様のことであろう。

江南をはじめとして、ソウルの外縁部と都心半径の20～30km距離の新都市にある大規模の高層アパート団地の画一的で、単調な景観に対する反動、いやそれより脱出してより多様で意義のある景観に帰ろうとする願いがポストモダンな傾向を助長していると考えられるが、それよりは脱工業化の生産構造の再編が根本的な動機とも考えられる。Teheran路を中心とする江南地域のサービス構造が生産者及び事業サービス優位に変わる過程、言い換えればpost-fordismの柔軟的生産構造への転換過程が消費文化のポストモダンな傾向と並行的に進行していると考えられる見解がもっと説得力を持つ。

現在、ソウル市は清溪川の復原計画を推進しており、都心周辺などの落後地域を開発して都心のニュータウンを造成しようと計画している。生態的な景観の回復は景観の歴史的な連続性の回復という側面からもっと意義のあることである。

一方、最近江南の南部で始められた30階～66階、超高層の摩天楼型の住商複合アパートの建設ブームは都心と周辺の所々まで及んでいる。一棟におおよそ千数百世帯を受容する豪華で高価のアパートの需要は一般アパートとは違って買値及び税制上の制限がないということから、人気を集めている側面を持っている。ところが、市民達の生活パターンと様式が変わっているということ、従ってより高い生活の質を求めようとする消費文化が拡散しているという事実の結果と考えられる。

## 【参考文献】

- 銭俊佑, 2001, 서울 都市空間構造變化에 관한 研究-都心・副都心を 對象으로-, 漢陽大 碩士論文。  
 高光萬, 2000, 서울시 空間構造 變化의 政治經濟學的解釋, 漢陽大 碩士論文。

- 崔基燁, 2000, 韓國의 都市, 韓國地理. 第29次 世界地理學大會組織委員會 編.
- 康泓彬, 1999, 서울都心空間의 變化와 政策의 歷史 I: 管理主義의인 接近, 서울市政研究 第6卷 1號.
- 〃, 1999, 서울都心空間의 變化와 政策의 歷史 II: 計劃의 패러다임의 摸索, 서울市政研究 第7卷 1號.
- 서울特別市, 1997, 2011서울都市基本計劃, 서울市政開發研究院.
- 이희정, 1997, 서울시 詳細計劃樹立指針研究, 서울市政研究.
- 한영주·金泰煥·洪명표, 1997, 서울事業서비스의 空間構造, 서울市政研究 第5卷, 第1號.
- 강우원, 1996, 서울都心部 製造業의 立地特性研究, 서울시立大學校, 서울學研究 7.
- 권영덕 외, 1996, 서울市用途地域 細分化 基準設定, 서울市政研究.
- 최근희, 1996, 서울의 都市開發政策과 空間構造, 서울學研究, 서울시立大學校.
- 金光鉉, 1995, 歷史都市서울과 日常의 都市風景, 서울學研究 4.
- 李揆穆·金漢培, 1994, 서울市景觀의 變遷過程研究, 서울學研究, 서울시立大學校.
- 이성룡·정적, 1993, 서울都市景觀 管理方案研究(I), 市政研究.
- 〃, 1994, 서울都市景觀 管理方案研究(II), 市政研究.
- 〃, 1997, 서울都市景觀 管理方案研究(III), 市政研究.
- 朴善美, 1993, 都市空間의 變化에 內在한 政治經濟的 論理의 糾明, 地理學 28-3.
- 朴良浩, 1993, 近代都市形成의 經濟的側面, 韓國都市論, 博英社.
- 鮮于惺, 1993, 서울商業街路景觀의 變遷 및 特性에 關한 研究, 서울시立大 碩士學位論文.
- 조명래, 1993, 轉換基 大都市發展의 딜레마와 展望, 韓國都市論, 博英社.
- 韓國空間環境研究會 編, 1993, 서울研究, 한올아카데미.
- 김정희, 1990, 都市景觀의 二重構造의 解釋에 關한 研究, 서울시立大學校 造景學科 碩士學位論文.
- 孫禎睦, 1988, 韓國現代都市의 발자취, 一志社.
- 尹日成, 1987, 서울市都心再開發에 對한 政治經濟的 分析, 서울大學校 碩士學位論文.
- 서울特別時, 1984, 2000서울都市基本計劃(案), 서울大學校環境計劃研究所·都市 및 地域計劃研究所.
- 金儀源, 1982, 韓國國土開發史 研究, 每日經濟新聞社.
- 崔基燁, 1980, 韓國 都市system의 成長行態, 地理學研究 5號.
- 朴泳吉, 1976, 서울都市計劃變遷史, 檀國大碩士學位論文.
- 統計廳(청), 地方自治部 및 內務部: 各年度, 韓國統計年報.
- Soja, Edward, 2000, Postmetropolis, Blackwell.
- 〃, 1989, Postmodern Geographies, Verso.
- Ki-Suk Lee, 1997, The Emerging Multicenters and Some Implication of Global Change in the City of Seoul, Korea, Journal of the Korean Geographical Society.
- Zukin, Sharon, 1991, Landscape of Power, Univ. of California Press.
- Harvey, David, 1989, The Urban Experience, Blackwell.
- Whitehand, J. W. R, 1981, The Urban Landscape: Historical Development and Management.

## 【要旨】

この談論はソウルを近代的発展主義大都市（developmentalist metropolis）の典型とみなし、大規模の画一的で発展主義的な開発が景観の空間的、時間的連続性を断絶していく過程とpost-Fordism的生産体系への転換が資本主義社会の多様な消費階層及び消費集団の場所と景観を分化させていく過程及びその含意を探索しようと試みた。

東アジアの特殊な地政学的位置を占有していたために、近現代史の激動の渦中で試練を受けてきた結果、成長、発展が遅滞してきたソウルは西欧の先進諸国が約200年の間に成し遂げてきた都市化の過程をわずか一世代の短期間で圧縮的に達成したのである。大規模の開発計画にしたがって止むことなく都市の成長と発展を推進するため、国家権力と資本が協力して強力な政治、法制的な規制を作用させてきた。その結果、短期間で急速な産業化と都市化を達成することができたのである。

1953年の韓国戦争以来、戦災復旧から始まった開発事業は順次的に都心地再開発、漢江及び江南の新しい街地開発、そして都市外縁部の大規模集団の住居団地開発の三部門を主軸として遂行されてきた。これらの開発こそ発展主義の実践的現場、まさにその典型といえるだろう。都心部再開発は政治権力と資本の結託による特惠の開発であり、江南の新しい街地開発及びその他の大規模高層アパートの集団開発は行政主体が不動産経営を導き、不動産資本の成長を支援、育成してきたことを表わす見本であった。

江南の新しい街地開発にしたがってソウルは漢江を挟んで江北と江南に二分される一次的な物理的構造を持つようになったが、この二分構造は同時に旧と新、落後と開発、社会的身分及び地価の低高の対立的差異という記号論的・二元構造を造ったのである。江南の開発にしたがってソウルは江北の単核構造から江北の旧核心、漢江の南側の江南核心、そして永登浦核心となる3多核心構造へと変わる。江南の核心はpost-fordismの柔軟的生産体制への転換に従う生産者サービスの集中、及び世界化の進展に沿った国際機能の集中によって形成されたという点に注目される。

ソウルの景観は朝鮮時代の歴史景観、日帝時代の近代景観、60年代以後の現代景観、そして最近の消費景観とに分けて考えることができる。ソウルの原初的景観は四神山と漢江が襟帯してなされる典型的盆地型の風水形局の景観である。この風水形局は生態、審美、情緒、防衛のあらゆる分野で意味を充満させた景観領域を成す。

近代的都市計画と共に「景観の連続性」は断絶されるが、日帝の近代的都市計画から始まった景観の断絶は現代の発展主義開発によりさらに加速化してきた。景観の連続性の断絶は時間と空間、両方から共に進行されて時代的層位を表わす異質的な景観が混在する都市風景を演出し、また連続されるべき景観軸が街路と建造物により断絶されてきた。

60年代末から都心再開発計画により国際様式である機能主義の高層ビルが画一的な都市景観を造ってきたし、70～90年代には漢江を中心として江南が開発されるにつれ、漢江沿岸がソウルの現代的景観を代表するようになった。住居様式は高層の大規模アパート団地が変わり、ソウルの周辺部を囲んでいる。最近のソウルは都市の景観と構造が機能的に分離されたというより、ファッションタウンという高層専門衣類商店街の群集地区、大規模mall、ポストモダン風のファッション商店街、大学村を始めとする若者世代趣向の街などのような、所得階層別及び年齢集団別の消費場所及び消費景観への分化が顕著に進行していく過程を露呈している。